

## マリリン・ロビンソン 『心の不在—自我の近代的神話からの内省の消失』 2\*

森本信子\*\*

### 第一章 人間の本質について

ラッセルは、宗教家たちがよく持ち出す自己弁護、宗教が文明の道德水準を上げるという議論に異議を唱えようとする。フランス革命や20世紀の無神論的な諸体制は、これまでと同様に、比較点を提供してくれそうだが、ほとんどこういった見方に有利にはならない。ともかく、難癖をつけても無意味である。ラッセルが毛嫌いするキリスト教が彼の出合ったキリスト教なら、そのキリスト教は、その宗教がこの世に存続してきた一つの形である。他の人たちは他のキリスト教に出合ってきた。このことは、全体としての宗教はもちろん、一つの宗教の定義をめぐる数々の困難に満ちた宇宙のもう一つの例である。それにしても、一つの論争がこれほど何世紀にもわたって文明の中心で猛威をふるうのを見るのは奇妙なもので、少なくともその半分は自称合理主義者の熱のこもった仕事である。また、自らが真実でかつ正しいとする満足感を一つの立場に保証する論争上の定義を超えて、主な用語の定義をしようという試みがほとんどなされないのを見るのも奇妙なものである。

私が宗教にこだわるのは、宗教は明らかに、人間の心の性質と作用を説明する上で中心的要素だからである。宗教は深い洞察能力を示すのか、それとも異常なまでの妄想傾向を示すのか。心自体がそうであるように、おそらくその両方だろう。1927年に、神の存在を擁護する古典的な議論に反論する最中に、ラッセルは創造主への信仰を次のような言葉で扱った。「世界に始まりがあると仮定する理由は全くない。物事に始まりがなくてはならないという考えは、まさに我々の想像力の貧困さによるものだ。したがって、おそらく、私はもうこれ以上、造物主に関する議論に無駄な時間を費やす必要はないだろう。」<sup>8</sup> 彼がこう述べた時代には、これは科学的な見地から完全に信頼できる言明だった。その後、2年経って、エドウィン・ハッブルが、宇宙が膨張しつつあることを示唆すると理解される観察を行い、かの爆発を超える運動分与という、始まりに関する現代版の物語が生まれた。物が真に存在となったという事実、あるいは、いわゆる始まりが聖書の創世記に書かれているのと同じく突然だったように思われるという事実によって、誰も信仰へと導かれる必要はない。だがやはり、ラッセルの科学は間違っていたのである。存在の本質にきわめてつながりの濃い始まりという偉大な問題において、多くの「原始的」または古典的な諸宗教の方が、より健全な直観を持っていた。この事実が人間の洞察力の証拠としての力は持たないとしても、なお、説明不能であるからこそその厳粛さがある。古代の人々の心が宇宙の起源を考えたことを思うと、人間のありようと、その心のありように対し、いくばくかの畏敬の念を持たざるを得ない。

私はここで、宗教に特別な注意を向けようとしたのではない。非宗教家である、バートランド・ラッセルとジョン・サールを引用することで、感じられた経験としての心が現代思想の重要な領域から排除されてきた、という私の議論を進めようと思ったのだ。他の点では非常に異なる、心・脳を対象とする現代思想の諸学派の、特徴的な形態論を考察することに多少なりとも限定するつもりだった。しかし、これらの学派自体が、問題として、偏差として、あるいは敵として、宗教に没頭しており、この問題を避けて通れないものにするほどなのである。信仰が文化と歴史の要素

\* Marilynne Robinson, *Absence of Mind: The Dispelling of Inwardness from the Modern Myth of the Self*. New Haven: Yale University Press, 2010. pp.11~29. 東京薬科大学紀要第15号掲載の続きである。

\*\* 薬学部 第4英語研究室

として記述されるとき、宗教的な思考と証言に関する膨大な文献が調べられずに残されたまま、信仰の本質が著しく単純化される傾向がある。宗教が西欧的な知識で理解しやすい用語によって分節されるとき、宗教にへりくだることは確かに難しいだろう。誠実にその本質を探究しようとするなら、バッハやパレストリーナに耳を傾け、ソフォクレスやヨブ記を読んで、午後を過ごすことだろう。

その代わりに、宗教は、明らかに不愉快な傾向を帯びる、ある種の人類学的方法と仮定への入り口となっている。宗教は、人間の中に依然として残る原始性の証拠として扱われる。原始性は、あらゆる宗教を、土着の慣習についてヨーロッパ人がしてきた最低の評価と関連づけることを正当化し、人間自身が、もちろん啓蒙という使命は別として、恐ろしい、不合理な、理性のない、自己欺瞞に満ちたものだという仮定をも正当化する。現在果敢で新しいものとされ、ワッハブ主義と時折起る創造説の熱情の噴出によって現在正当化されるものの、18世紀の合理主義にも十分存在する宗教に反目する、暗黙のあるいは明白な論争の背後に一つの議題があるとすれば、それは、宗教は現代の人間性の人類学、つまり、へりくだりの解釈学を主張するための修辭的機会を作るということだろう。

効果的にへりくだるためには、関連するデータの狭義の定義にこだわるのが明らかに必要だ。神の存在および神の存在を理解する種々の方法は、さまざまな集団と国々で古くから非常に豊かな対話を形成してきた。神あるいは神々は隠されているのか、不在なのか、というのが、宗教的文献において繰り返される語句である。敬虔な人たちは神的な現存が欠けているかのように世界を見、経験について十分に考えを巡らせてきた。聖者たちは暗い夜を過ごしそれを証してきた。隠された神、また同時に神の死について書いたのはルターであり、グロティウスの「神もまたおりませぬ」に新たな神学的意味を与えた。宗教を却下する人々による宗教の描写は、骨や羽や他力本願に関連する事柄、儀式や社会的結合や偽りの原因論や死の恐怖に関連する事柄に宗教を還元する傾向があり、そのような描写から浮かぶ宗教の永続性は彼らにとって非常に不愉快なものとなるのである。その上、宗教が確かに永続しているという事実があり、しかも、どこよりも現代的な国であるという重大な点はさておき、ここアメリカでそうなのである。さらなる不愉快の種である。

バートランド・ラッセルは言う。「言葉は時に信仰の複雑さを隠す。ある人が神様を信じていると言うと、まるで神がその信念の全内容を形成するかのように思えるだろう。しかし、真に信じられていることは、神が存在するということであり、これは単純とは程遠いものだ。同様に、信仰の内容が一見単純に見えるあらゆる場合が、よく見ると、内容とは常に複雑であるという考え方を確認させるものであることがわかるだろう。」<sup>10</sup> このよき無神論者は、宗教への嫌悪にもかかわらず、内省することによって、人間の心を理解する手段として自分自身の心を観察することによって、優れた読者なら共有できると想定した言葉の作用に喜びを感じつつ、論を進める。彼の宗教の拒絶は本物で深い。固有の内容が何であれ、人間の主観性の本来の複雑さを認めそこなうという犠牲を払ってその拒絶を正当化することはしない。これを認めることこそ、人間が思考し行ってきたすべての事柄の保管文書を開くことであり、心がどう自己表現するかを見ることであり、科学が暗黙に却下する類の仮定的な証拠を考察することである。

\*

「原始的」という考え方の二次的な使用が、常に、疑わしい情報の疑わしい使用に関連しているように思われる。『空白の石板：人間の本質の現代的否定』の中で、スティーヴン・ピンカーは、空白の石板という、誤った自己概念を最大の主張点とする彼の考え方に沿って、高貴な野蛮人と同様に、機械の中の幽霊である魂における信仰の仮面をはぐ。彼は、これらすべての用語を、それらが生まれた哲学の伝統の真剣さとはほとんど見合わない程度に、単純で素朴なものにとらえている。ピンカーにとって、人間の本質とは行為において遺伝的に決定した要素であり、この要素は重要な意味を持ち広く認知されていないと考えている。高貴な野蛮人という考え方を論じる中で、20世紀の戦争状態による男性の死者数を比較するグラフを提示する。このグラフは、戦死者の割合としての、ヨーロッパ人とアメリカ人を母集団とするこの死亡率が、以前の研究なら原始人として扱われた、同時代の種々の「前国家社会」で報

告された死亡率に比べればきわめて低いことを示す証拠として提示されている。見開きページで、ピンカーは、マーガレット・ミードのサモア調査の誤りと、「優しいタサダイ族」の発見が脚色されたものであることを記している。これは記す価値がある。というのは、彼の持ち出すグラフ上の2つの棒線はヤノマモ族の2つの下部グループを表しており、この部族の攻撃性は、これまた報告が疑わしいと考えられてきた人類学の現地調査の発見だったからである。彼の議論は、「平和を愛し、平等主義で、エコロジーを愛する土着民というイメージ」の却下であり、その議論からすると、これらの前国家社会の人々が本当に攻撃的であるという趣旨の情報を確かに歓迎したい気持ちになるだろうから、まだ少しは公平な証拠の採用を見るのは気休めとなる。また、こういった観察が、タサダイ族や、サモア人や、ほとんど確実にヤノマモ族の問題でこれほど明らかにされてきた捏造や操作に陥りやすいものだ、と記す注を見、今度はそういった観察を使用する人々が、自分たちの見方に有利に働く傾向を持つデータを過大評価しがちになる、と白状するのを見るのも気休めになろうというものだ。<sup>11</sup>

他の疑問がわく。戦争状態とはどういう意味だろうか。第一次大戦の軍隊が使うために生ゴムが略奪されたアフリカの諸地域で殺された数百万の人々も、その犠牲者に含まれるのだろうか。あるいは、数に入るのは、ヨーロッパとアメリカの戦死者だけなのだろうか。おそらく一方だけが有効な武器を所有していたという理由で、植民地主義それ自体は戦争状態の定義から外れるのだろうか。スターリングラードの包囲や、ベルリンの壁陥落での男性以外の死者数は、この計算から除外すべきなのだろうか。ここでの問題点が、社会がいかにか致命的な暴力に陥りやすいかということなら、戦争状態による男性の死亡率は明らかに狭すぎる範疇で、意味を持たない。これら前国家社会の人々が文字の記録を持たないという事実、また、戦争状態に関する伝統的な物語は、戦争に関連する数を大きく誇張する傾向にあるという事実を無視する場合でさえ同じことが言える。

それに、人口の規模がこれほど大きく異なる場合、割合を基礎としてこのような比較を行うことは少し無理があるのではないだろうか。ピンカーは「50人の狩猟集団における死者2人は、アメリカ規模の国での死者1千万人に相当する」と書いている。<sup>12</sup> これは意味のある言葉だろうか。25人の大家族ならどんな家族でも時には1人の死者が出るものだ。だからと言って、それが人口全体のうちの500万人が亡くなることに相当するだろうか。1千万人の人々を破滅させるには、実行できる設備を備えた社会が展開する、長期にわたる断固たる暴力作戦が必要となるだろう。西洋社会の歴史を考えると、考えられないことではない。我々が皆承知している通り、そういう規模の暴力に参入するのに必要な方法の準備がすでに整っているはずだということになるだろう。このことが我々の傾向に反映されているだろうか。さらに重要なことに、50人の狩猟集団では死者数は2パーセント未満には決してならないが、アメリカで250万人が亡くなっても1パーセントを超えず、この計算方法では、我々は攻撃性のより低い社会となるだろう。さらに、いずれにせよ、なぜ我々は男性の戦争部隊をアメリカの人口全体と較べているのだろうか。

最後に、どんなにへんぴで異国的であっても、20世紀の社会を考えることによって、高貴な野蛮人の神話の仮面をはくことは理にかなっているだろうか。彼らの歴史を知ることができないのだから、我々にとって原始性に思えることが奪取や疎外の結果でないかどうかは、知る余地がない。ピンカー自身、タスマニア人たちがオーストラリアから移住した後にある種の文化的弱体化が起こったと記している。<sup>13</sup> 私は原始の無垢という概念を特に是認するわけではないが、これほど欠陥だらけの事例がその反証として持ち出されるのも賛同しかねる。とは言え、ピンカーが自説を裏付けるために使用するグラフの役目は、本質的な人間性を示し、自分とは何かを我々に教え、自分たち自身に対するできるだけ厳粛な問いへの答え、あたかも科学的客観性という権威を秘めているかのように示された、きわめて疑わしいデータに対抗しうる答えを提示することである。

この重要な対話を全面的に特徴づける怠慢がある。その原因は先に言及した境界神話ではないかと私は考える。この神話は、ダーウィンのあと、ニーチェのあと、フロイトのあと、構造主義とポスト構造主義のあと、クリックとワトソンおよび神の死のあとで、ある仮定は修正済みで不可避なもののみなし、他の仮定はあらゆる時期あらゆる目的

にとって素朴で擁護できないものとして並べられ、よりよい知識にとって代わられるものとみなすべきだ、という考え方である。よく引き合いに出されるのがガリレオだ。現実であれ想像上であれ、任意の歴史のある瞬間を支配する際、境界の瞬間として、ある作家やある学派が、過去を特徴づけ、その点から先へと言説を進めていくための用語を確立する権利という特権を主張する。ある種の変形力を有する概念が、世界を新しい光のもとで考え直すよう我々に迫り、過去の思想やその遺物の全面的な誤りを仮定するのである。ある原理への新説の流入が急な出発の合図を出そうと見える。こういったやり方の多くの著述家にとって重要なモデルがダーウィン主義だから、文化の進化論が彼らの世界観で重要な位置を占めていると思う向きもあるかもしれない。しかし、彼らの描くこの変形は非常に完全な進化的飛躍のようなもので、遺伝子の継承を完全に飛び越えてしまった。自然におけるのと同様文化においては過去を置き去りにすることはできないが、まさに置き去りにしたこと、古い過ちを新しい洞察から分離する境界を越えたことが、これらの思想の学派が歩を進めるための、姿勢として、また方法としての所与なのである。かつて勝利主義は理性の友ではなかった。ひるがえって、これらの著作のあまりにも多くに共通する調子が横柄さである。それでも、これらの著述家たちが読者をどう見ようと、暗闇に座る人たちに真実をもたらす者として、知的な厳格さへの献身を表明した限りはそれに則って行動すべきである。

私は、集団的知的経験において実際に境界が越えられ、「現代思想」と呼ばれる領域に入ったと考えるよう教育を受けたし、我々はそう考えることに慣れなければならない。我々は一方方向にだけ開くドアを通り抜けた。主だった幻想は永久に葬り去られた。ダーウィン、マルクス、フロイトといった面々から我々が学んだことは、現実に対する非歴史的であるほどに深い洞察だった。批判哲学は郷愁であり、懐疑主義は疑り深い人の心が閉ざされ恐れていることを示していた。懐疑の時代まで、懐疑主義は、任意の思想に対する素朴な反応に見えたはずである。だが、彼らの提唱する考え方が、知的懐疑主義の究極という、懐疑の最後の言葉となって姿を現した。そして、何世代にもわたって尊重され、奇妙なことに変化せぬまま、時代を画す変化との関連を通して著しい持続性を獲得した。種をまいた学問から新しい解釈が常に発芽し、それら自身からさらに発芽が繰り返され、さまざまな種類の改訂版が「新」という接頭辞をつけて世界の注目を引こうとし、同時に、そうでもしなければ離脱と見なされる恐れのある学派に対して変わらぬ忠誠を披露するのである。接頭辞「ポスト」はもちろん、ある種の境界を超えた、それゆえまた新たに世界の注目を喚起することができる、という意味である。

現代主義の合意を支える思想の各学派は、互いに深く矛盾しており、あまりに矛盾が大きいためそれらが集合として一つの偉大な結論を支えると考えすることはできない。そのように理解されているという事実が当然示唆すると思われるのは、その抵抗しがたい結論が先にあり、おそらくはそれに鼓舞されて、それを支えるための議論が後に生まれたか今なお作られている、ということだ。「現代」思想の種々の伝統の中のあらゆる変種を通して議論も疑問視もされずにいる中心的な仮定とは、個々の心の経験と証言は説明し尽くせるものであり、人間の本質と存在全体についてどんな合理的な説明でもなされれば考察から除外することができる、というものである。その代わりに我々は、一般化という偉大な計画、つまり、人間という種に、自分たちが何であり何でないかを教える厳粛な努力を始めるが、これは現代思想の初期に顕著に見られた。社会学と人類学が二つの例である。

現代性が我々を導いた偉大で新しい真実とは、所与の世界は偶然により作られたものであり、発展と洗練の論理、および、現実と経験を形成するあらゆる複雑性と多様性をあますところなく説明するに足る内在的な加工の論理を通して、少しずつ時間をかけて、登れそうもない山を登った（ドーキンスの著書名：訳者注）、ということだと一般に考えられている。かつて断言され、今では証明されたと考えられているのが、伝統的な西洋宗教の神は存在しないか、時間と因果関係の最も遠い端に存在するということである。どちらの場合においても、神を所与としない合理化精神の原理を通して、物理的な世界の理解が発展し加速するという認識に基づき、人間の経験の中に空白が入り込んだと考えられている。

今では克服された過ちを犯したとしてデカルトを非難するのが一般的である。評判が信用できるとすれば、魂の座として松果体を提示したその同じデカルトが、心・魂と肉体の二項対立、西洋思想に蔓延した二項対立を作ったとして非難される。専門家でない者には、魂を脳の深い内部に位置付けることと、現代の著述家たちがデカルトの過ちからいかに自由であるかを示すためにするように、道徳観を前頭葉前部の皮質に位置付けることが、原理的にどう違うのかよくわからない。<sup>14</sup> デカルトは、これまで出発点であり、また今後もそうあるべき諸概念を示す道標であるけれども、またもう一人の境界としての人物である。現代の歩みには多くの落後者がいて、まさに我々の誰もが、まさに先駆者その人でさえ、ある無防備な瞬間にデカルト学派に後退する可能性があることが所与なのである。

科学を支持する思想や議論のやり方の名声は、それらの影響に免疫があったと見なすことのできる学問の諸領域にとって意義を持つものだった。「宗教の科学」は、原始性のモデルをこの最も重要なテキストに適用することによって深く影響を受け、旧約聖書学に甚大な結果をもたらした。私は、ジェイムズ・L・キューゲル著『聖書の読み方：聖書ガイド、昔そして今』という題名のかなり奇妙な本を読んでいる。キューゲルの論文によれば、聖書は起源においては宗教的な文献ではなく、西暦紀元前の時代になってからようやくそう考えられるようになった、という。ありうることもかもしれない。ギルガメシュ神話と創世記の洪水物語の類似点についてこう述べている。「バビロニアの洪水物語を読む人はおそらく、(創世記の説明に明らかに関連があるために)興味深いと、もしかしたら厄介だと思うだろう。だが、『その教訓を自分たちの生活にどう適用すべきか』といったどんな問いも、そういう読者には無理解と嘲笑を持って迎えられるだろう。『教訓だって？まさか、4000年前に何人かのメソポタミア人に書かれたものから教訓だなんて！』と、この同じ人が今度は本質的に同じ話であるものを創世記で読むと、精神を鼓舞するあらゆる種類の教義に満ちていると思うのである。そう、そういう人は不誠実であるか、基本的な事実をただ気付き損ねただけである。」<sup>15</sup>

優雅なバビロニア、ギリシャからアッシリアのローマまで一確かに古代だが、原始的とは程遠い。「何人かのメソポタミア人」がその問題に関して我々に語るべきことを何も持たず、聖書の執筆者たちの興味を引くことを何も言わなかったなどと仮定する根拠はない。我々は、古代のインド、中国、ギリシャで書かれたものに意味を見出す習慣を完全に身につけている。シュメール、バビロニア、アッシリアの各洪水物語は、確かにこの興味深いジャンルの最も初期の例の中では、神義論である。なぜ大災害が起こるのか、どんな意味を持つのか、神々の本質と、人間に対する神々の期待と感情が、これらの物語の中で探求される。

聖書の洪水は、この物語を一神教へと変化させ、大きな破壊を、バビロニアの物語のように人間が発する耐えがたい雑音に対してではなく、人間の暴力に対する神の反応へと変化させて、語り直す。このような変化は他にもある。神は我々に忠実だが、それはバビロニアの神々が食べ物を与えてくれる人間に依存しているように、神が我々に依存しているからではない。言い換えれば、物語の枠組みを再構成することによって、人間は壊滅を経験するという物語の所与を認め、そののち、神と神のうちに含意される人間という概念を徹底的に語り直しながら、物語を解釈するのである。バビロニアの文化は強大で影響力の強いものだった。ギルガメシュ叙事詩は古代中近東のあちこちで様々な形で見つかった。その中の最も劇的な部分がヘブライ語の創世記にただ継ぎ接ぎされ、誰も盗作に気付かなかったと想像するのは馬鹿げている。変化を伴いながら彼らの物語を語り直すことは、その物語の異教徒的な神学的含意に対して防衛し、また、結局のところ、非常に大きな関心を寄せる諸問題に取り組むことであるはずだ。

こういったことすべてから仮定されるのは、これら古代の人々が知的な生活を送っていたということ、周囲の文化に対して重要な気付きがあったということだ。継続的な接触を示す考古学的な証拠がはっきりと確立されている。キューゲルは旧約聖書の学者であり、バビロニアの輝かしさについて私よりも明らかによくご存じである。しかし、先に引用した文章が含意するのは、バビロニア版の洪水物語は、慣例としては聖書に関する類の—キューゲルが「精神を鼓舞するあらゆる種類の教義」の発見と呼ぶ—解釈から、バビロニアの輝かしさを排除する、ということだ。バビロニ

アの低評価はヘブライ語の聖書の低評価の基礎となる。現代主義的逸脱である。一方の語りが無意味であると仮定するならば、もう一方の語りも無意味だと仮定することができようし、そうせねばなるまい。この結論はあらゆる部分において完全に恣意的である。

キューゲルのような議論の持つ力の多くは、その基礎となる情報が、もう一つの新しい、世界を変える境界であり、過去の艦隊をことごとく燃やす知の大胆な打撃の一つである、という考え方から生まれる。痛みを伴う認識へ我々を放り込むはずの衝撃的な新しさというこのモチーフは、まさに「現代」の署名であるから修辞学的に強力であり、我々はそういった主張を妥当なものとして受け入れるよう条件づけられているのでより一層強力である。しかし、このモチーフはしばしば、以前の知識状態を誤って伝え、あるいは、単にそれを調べ損なうことによって効果を発揮する。1622年に、高名な初期の法律の理論家であり学者であったフーゴ・グロティウスは、『キリスト教の真理について』という論文を書いた。この本は17世紀以来、何度も英語に翻訳された。16章と17章でグロティウスは、まさに他の古代文化が同じ物語についてそれぞれ固有の形を持っていることを根拠として、創世記の真理を弁護している。これら「外国人の各証言」が示しているのは、「モーセの記述が宣言しているように、最も古い報告がすべての国でそのようになされた、というのは、後に残された「世の始まり」に関する記述は、大部分、フェニキア人の最も古い歴史においても同じであるからだ。部分的には、インド人やエジプト人の歴史にも見つかる。また、動物が作られ、最後に人間が作られたこと、また、それが神の姿になぞらえたものであったことも書かれている。さらに、他の生物を支配する力が人間に与えられたこともである。これらの事柄は、多くの著者に書かれたあらゆるところに見つかるだろう。」<sup>16</sup>

私は、創世記と古代文献一般の間にそれほど大きな類似性を見つけたと断言することはできない。ここで私が言いたいのは、ただ、類似点が見出されるところで、たとえ、それらの類似が、聖書テキストの権威を裏付けると考えられるとするグロティウスの考えに賛同できないとしても、権威を傷つけると考える必要はない、ということである。さらに特化してキューゲルの論点を検討するならば、グロティウスはノアの洪水物語に他の古代中近東版があることに明らかに気付いている。グロティウスはこう書く。「我々が読んで知り、寓話の許容範囲で詩人たちが没頭したこれらの事柄を、最も古代の著者たちは、真理に沿って、つまり、モーセの言うとおりに伝えていた。すなわち、カルデア人の歴史でベロッサスが、アッシリア人の歴史でアビデヌスが、放たれた鳩について書いており、ギリシャ人の一人、プルタルコスも同じことを書いている。」<sup>17</sup> ベロッサスは紀元前4世紀と3世紀に活躍したバビロニア人の歴史家だった。アビデヌスは紀元前3世紀に書物を著したアッシリア地方のギリシャ人の歴史家だった。彼らの著作の断片は他の初期テキストの中に残されている。

このように、17世紀初期にグロティウスが入手でき、バビロニア人とアッシリア人がある細部について創世記のノアの洪水に匹敵する洪水物語を持っていたことを明らかにする、古代の情報源があったのである。繰り返すが、グロティウスが言うようにこのことがモーセの説明の真理の証拠であると言えるかどうか、実際のところモーセを弁護するために引用されうるかどうか、は確かに議論の余地がある。だが、19世紀以来の聖書学で非常によく見られ、キューゲルが繰り返す考え方、つまり、これら古代メソポタミアの物語の存在は驚くべき現代の発見であり、聖書の洪水物語の意味深さと聖書の信憑性一般に関して当然疑念を投げかけるべきであるという考え方は、明らかに間違っている。古典的の学問が衰退したこと、および、伝統的な信仰の本質に誤った性格付けをしたことが、この考え方のような文脈の要因である。私には同じ程度に重要に思えるもう一つの要因は、「現代」は古い過ちの足元にダイナマイトを置き、霊廟や記念碑を倒すという、「現代」の偉大な神話と原理である。過去への軽蔑こそ、間違いなく、恒常的な過去の無参照の理由である。

ギルガメシュ叙事詩の洪水物語の聖書の適応に注意を傾けるのに必要な、傷ものの博識といった類は、ウィリアム・ジェイムズが浅きに傾く知の力と呼んだものの古典的例である。<sup>18</sup> 繰り返すが、私がキューゲルについて述べるのは

手元に彼の本があるからだ。常に同じ結論になりがちなこの種の学派が、19世紀半ばから旧約聖書学を支配してきた。別の見方をする人は「不誠実であるか、基本的な事実にただ気付き損ねただけである」という、キューゲルのきわめて率直な言い方は、現代的だと自己表明する類の思想のおそらく最も一貫した特徴である、知的優位性の主張とでもいったものである。

人間が残してきた記録に関心を向けることから生まれる、人間の本質への洞察の豊かさをどんなに犠牲にしても、科学と同様に学問が保証すべき立証的な諸基準を考慮せずに、まるで緊急の聖戦であるかのように、どこまでも仮面はがしを追求する傾向は、知の歴史において、現代という時代の最も顕著な特徴だと言えよう。

(第一章 人間の本質について 完)

注

- 8 Russel, *Why I Am Not a Christian*, 7.
- 9 Bonhoeffer, *Letters and Papers from Prison*, 359.
- 10 Russel, *Analysis of Mind*, 236.
- 11 Pinker, *Blank Slate*, 56-57. 参照 Patrick Tierney, *Darkness in El Dorado: How Scientists and Journalists Devastated the Amazon* (New York: W.W.Norton, 2000), and Robert Borofsky, *Yanomami: The Fierce Controversy and What We Can Learn From It* (Los Angeles: University of California Press, 2005).
- 12 Pinker, *Blank Slate*, 56.
- 13 Ibid., 69.
- 14 Pinker, *Blank Slate*, 42.
- 15 Kugel, *How to Read the Bible*, 80.
- 16 Grotius, *On the Truth of the Christian Religion*, 11.
- 17 Ibid., 13.
- 18 参照 James, *Varieties of Religious Experience*, 389, note 10.